

1. 評価結果概要表

【評価実施概要】

事業所番号	0971300017
法人名	医療法人 渡部医院
事業所名	グループホーム 和
所在地	栃木県那須塩原市大原間72-1 (電話)0287-65-5753

評価機関名	特定非営利活動法人アスク		
所在地	栃木県那須塩原市松浦町118-189		
訪問調査日	平成20年9月30日	評価結果確定日	平成20年10月27日

【情報提供票より】(平成20年9月16日事業所記入)

(1) 組織概要

開設年月日	平成17年 3月 1日		
ユニット数	2 ユニット	利用定員数計	18人
職員数	9人	常勤 8人, 非常勤 1人,	常勤換算 8.5人
	8人	常勤 7人, 非常勤 1人,	常勤換算 7.8人

(2) 建物概要

建物構造	木造づくり 1階建て
------	---------------

(3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	26,000円	その他の経費(月額)	水道光熱費 15,000円 日用品費 9,000円 おむつ他 実費	
敷金	無	有りの場合償却の有無	有 / 無	
保証金の有無(入居一時金含む)	無			
食材料費	朝食	円	昼食	円
	夕食	円	おやつ	円
	または1日当たり	1000円		

(4) 利用者の概要(9月16日現在)

利用者人数	18名	男性	3名	女性	15名
要介護1	5名	要介護2	4名		
要介護3	5名	要介護4	3名		
要介護5	1名	要支援2	0名		
年齢	平均 32.4歳	最低	70歳	最高	92歳

(5) 協力医療機関

協力医療機関名	医療法人 渡部医院、江口歯科医院
---------	------------------

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

これまでの理念「昔ながらの生活、個人が尊厳される生活、創造性豊かな生活」に、地域密着型サービスを表す理念「住み慣れた地域で生活を継続する事の支援」を加え、入居者が一番馴染んでいたと思われる場所での生活を念頭においた支援を心がけている。職員の入居者への理解は深く、共に喜び、感動し、入居者の孤独感に共感し、ユニット理念「寄り添う癒しのケア」「一人ひとりの生きがいの実現」、そして「認知症に視点をあてるのではなく、個人に視点をあてるケア」が引き続き実践されている。また隣接の法人医院、老人保健施設があることが家族にとっては安心に繋がっている。離設や災害時などに協力を得るためにも、職員の専門知識や技術を活かして認知症への理解を地域に広げ、地域との交流を深めていくことが期待される。

【重点項目への取組状況】

重点項目	前回評価での主な改善課題とその後の取組、改善状況(関連項目:外部4)
	前回の外部評価で提示された「地域との関わりや貢献」は、前管理者が講座の講師などを積極的に引き受けたことにより進展した。改善課題の解決や普段のケアの振り返りのためにも、自己評価や外部評価には職員とともに積極的に取り組むことを期待したい。
重点項目	今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)
	自己評価は毎回、全職員が記入し、ユニットごとにユニット長がとりまとめている。外部評価の効果が最大限に発揮されるには、職員一人ひとりの外部評価の意義や評価項目の理解が必要である、と管理者やユニット長は認識しており、今後、職場内研修等で学習をすすめることを期待する。
重点項目	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4,5,6)
	運営推進会議には地域の代表、家族、市職員、地域包括支援センター職員、NPOメンバー等が参加しており、ホームの運営や外部評価等についての報告や話し合いが行われている。介護利用料金以外の負担金(食材費、水光熱費等)について3ヶ月の経費実績を会議で報告し見直すなど、値上げにしても値下げにしても、家族の納得が得られるよい取り組みである。多くの家族に参加してもらうため、家族の都合を優先して開催している。
重点項目	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7,8)
	家族の意見や苦情は、直接会ったときに聞いたり、運営推進会議や意見箱、苦情相談窓口などの仕組みを整えて、把握しようとしている。しかし、サービスに対する要望や意向以外の運営に対する意見はほとんど出てこない。運営推進会議などでホームの運営について詳しく報告し、家族から意見が出しやすい状況を整えることを期待する。
重点項目	日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)
	自治会に加入し、回覧板で地域の情報を得ることができ、地域の祭りや公民館の行事に参加したり、併設老人保健施設の行事に参加して、地域の人たちとの交流の機会を増やしている。職員と入居者が食材の買い出しに行くスーパーマーケットでは、店員が顔見知りになっている。近隣の人が入居者の話し相手や洗濯物をたたむボランティアとしてホームを訪れている。

2. 評価結果 (詳細)

外部評価		自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	印	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
			は、重点項目。			印は取り組みを期待したい項目
.理念に基づく運営						
1. 理念と共有						
1	1		地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	これまでの理念「昔ながらの生活、個人が尊厳される生活、創造性豊かな生活」に、地域密着型サービスを表す理念「住み慣れた地域で生活を継続する事の支援」を加え、入居者が一番馴染んでいたと思われる場所での生活を念頭においた支援を心がけたいとしている。		入居者の一番馴染んだ場所が、生まれ育ったところなのか、結婚して住んだところなのか、働いていたところなのか、孫と暮らしたところなのか、本人にとっての地域はそれぞれ異なり、ホームのある地域とは限らない「これらの場所」をも把握した上で、入居者の思いに寄り添った支援を理想としている。今後の取り組みに期待したい。
2	2		理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	理念を玄関や事務所、キッチンのテーブルなどに掲示し、また、職員の名札の裏にも記載して、常に意識して取り組むようにしている。ユニットそれぞれの理念も作成され、入居者一人ひとりが尊重され、生きがいを実現できるよう、サービスを実施したいとしている。そのために、職員が入居者一人ひとりの考え方や好み、したいことの把握に努めている。		
2. 地域との支えあい						
3	5		地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	自治会に加入し、回覧板が回ってくるので地域の情報を得ることができる。地域のお祭りや公民館の行事に参加したり、地域の人々も参加する併設老人保健施設の納涼祭や秋桜祭に参加して、地域の人たちとの交流の機会を増やしている。また、職員と入居者が毎日の食材の買い出しに近くのスーパーマーケットに行くので、店員が顔見知りになっている。近隣の人が入居者の話し相手や洗濯物をたたむボランティアとしてホームを訪れている。		ホームの立地している地域へのPRのためにも「なごみだより」を活用することが期待される。また、資格を得、経験を積んだ介護職員が、地域住民に知識や技術を伝えたり、相談にのったりする役割を担うことも期待したい。

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	印	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	自己評価は毎回、全職員が記入し、ユニットごとにユニット長がとりまとめている。しかし、職員によっては外部評価の意義や評価項目の理解が十分でない場合もあり、今後の課題である。前回の外部評価で提示された改善課題のひとつに、地域との関わりや貢献がある。前管理者が講座の講師などを積極的に引き受けたことにより、地域への浸透が図られた。		外部評価の効果が最大限に発揮されるには、外部評価の意義や評価項目の学習が必要であると管理者やリーダーは認識している。改善課題の解決のため、また、普段のケアの振り返りのためにも、職員とともに積極的に取り組むことを期待したい。
5	8	運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議には地域の代表、家族、市職員、地域包括支援センター職員、NPOメンバー等が参加しており、ホームの運営や外部評価等についての報告や話し合いが行われている。介護利用料金以外の負担金(食材費、水光熱費等)について3ヶ月の経費実績を会議で報告し見直すなど、値上げにしても値下げにしても、家族の納得が得られるよい取り組みである。		できるだけ多くの家族に参加してもらうために、家族の参加の都合を優先しており、必ずしも2ヶ月に1回の定期的な開催はされていない。ホームの取り組みに対する家族の理解を深めるためにも、今後とも家族との連携・協力関係は強めていただきたい。
6	9	市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	市の職員が運営推進会議に参加する他、事業所は多くの関係者が関わる必要のある複雑な事例について市と相談・協議している。また、市が事務局となっている地域密着型サービス事業者連絡会議やケアマネージャー連絡協議会に参加して他の事業者やケアマネと情報交換したり、相談し合ったりしている。		
4. 理念を実践するための体制					
7	14	家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	入居者の様子や健康状態、金銭管理については、家族が面会に来たときに報告をしている。また、必要があれば随時電話連絡で様子を知らせている。職員の異動に関する報告は運営推進会議で行い、欠席者には会議の議事録を配布して、周知を図っている。不定期だが、「なごみだより」を発行し、家族にホームの様子を知らせている。		不定期発行の「なごみだより」を、ホームの様子を知らせたり、理念や考え方、取り組みを知らせる媒体として活用するために定期的な発行、せめて季刊発行とすることを期待したい。
8	15	運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族の意見や苦情は、直接会ったときに聞いたり、運営推進会議や意見箱、苦情相談窓口などの仕組みを整えて、把握しようとしている。しかし、サービスに対する要望や意向は出てくることが多いものの、運営に対する意見はほとんど出ない。		運営推進会議の日程は多くの家族が参加しやすいようにアンケートを採って決めている。従って毎回、複数の家族が参加している。今回改めて会議で外部評価について説明したところ、理解が深まった。ホームの運営について詳しく報告することで、家族からも意見が出やすくなるので、今後とも意見の出しやすい状況を整えることを期待する。

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	印	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
9	18	<p>職員の異動等による影響への配慮</p> <p>運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている</p>	<p>職員の離職が相次いだ時期があり、最近では管理者が職場を離れた。職員がやめるときは送別会を催し、入居者に説明をして別れることにしている。管理者の退職の際には、入居者一人ひとりに直接語りかけて説明し、納得してもらった。同じ時期にホームを退居した利用者がいたことも重なって、ダメージを受けた入居者もいたが、寄り添うケアを実施し、新しい入居者が来たことよって次第に寂しさが緩和されて来ている。</p>		<p>全国的な傾向とはいえ、離職者が多いことはホームの運営上問題である。家族の中には職員にかかる大きな負担を心配する向きもあり、今後とも、離職対策、職員の負担やストレスの軽減、人員配置の工夫などに努力するよう期待する。</p>

5. 人材の育成と支援

10	19	<p>職員を育てる取り組み</p> <p>運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている</p>	<p>事業所として職員が順次、認知症介護実践者研修を受講するよう配慮している。またリーダー研修や認知症介護指導者養成研修にも参加させ、職場リーダー層の養成をしている。法人では毎月、介護技術などの勉強会を実施しており、ホームの職員も参加している。新人研修はオリエンテーションで介護マニュアル等の提示後、現場でマンツーマンで指導に当たっている。介護職として自信が出てきたところで、夜勤勤務を割り当てるようにしている。</p>		<p>今までは、馴染みの関係を崩さないために、ユニット間の職員異動を避けてきた。今後は、職員の介護力向上や気分転換、両ユニットの入居者を職員が把握するためにも、ユニット間の職員異動を実施したい考えである。その成果に期待したい。</p>
11	20	<p>同業者との交流を通じた向上</p> <p>運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている</p>	<p>那須塩原市の地域密着型サービス事業者連絡会議やケアマネージャー連絡協議会にホームの管理者や計画作成担当者が参加して情報交換をしている。入居者のネガティブな問題に注目するのではなく、できることやしたいことに着目したポジティブな介護計画を立てるための工夫について、ケアマネージャー連絡協議会で話し合ったことが、ホームでの計画作成により変化をもたらしている。</p>		

安心と信頼に向けた関係づくりと支援

1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応

12	26	<p>馴染みながらのサービス利用</p> <p>本人が安心して、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している</p>	<p>入居者には家族とともにホームを見学し、納得した上で入居してもらうようにしている。また、居室をできるだけ自宅の自分の部屋に近い環境に整えるために、使い慣れた家具を持ち込んでもらっている。入居当初は不穏な状態になることもあり、できるだけ声を掛けたり、夜眠れないときにはベッド脇で寄り添うケアを実施している。</p>		
----	----	---	--	--	--

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	印	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	<p>本人と共に過ごし支えあう関係</p> <p>職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている</p>	<p>料理法を教えてもらったり、栃木の風習を伝授されたり、入居者からはいろいろと教えられることが多い。また、職員に疲れている様子が見えると「休みなよ」とか「お茶でも飲みな」と声を掛けてくれ、夜勤中にも職員を気遣い励ましてくれる関係がある。ストレスを抱えた職員の様子を敏感に感じ取る入居者がいることを知って、かえって自分の勉強不足を恥じ、入居者に育てられていると実感した職員もいる。</p>		
. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	<p>思いや意向の把握</p> <p>一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している</p>	<p>介護計画の作成に先立ち、本人や家族とよく話し合い、希望や意向の把握に努めている。アセスメントツールとして「センター方式」を採用し、家族の協力を得ながら、生活歴や価値観、宗教信条、趣味・好み、得意とすること等の情報を把握している。場合によっては友人や知人からの情報も収集し、本人を中心にした介護計画を立てている。ホームでの暮らしの中から、人となりについての新たな発見があることもある。</p>		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	<p>チームでつくる利用者本位の介護計画</p> <p>本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している</p>	<p>職員全員が一人ひとりの入居者について観察したことを「センター方式」のアセスメントシートに書き入れ、家族が書き入れた内容と合わせて計画作成担当者が介護計画の原案を作成し、管理者や本人、家族の了承を得ている。計画作成に当たっては、本人の「できないこと」に焦点を当てるのではなく、「できること」や「したいこと」に焦点を当て、前向きで、生活の幅が広がるような計画となるように心がけている。</p>		
16	37	<p>現状に即した介護計画の見直し</p> <p>介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している</p>	<p>初回の計画作成から概ね3ヶ月後と6ヶ月後にモニタリングを実施し、計画の継続か変更が検討される。変化がなければ1年後に改めて本人や家族の意向を聞き、再アセスメントを実施した上で計画を立て直すという方法が確立されている。ホームでの生活の中で観察された入居者の状態や状況の変化については、職員同士で話し合い、計画変更の際の参考にされる。状況の大きな変化で緊急に計画変更が必要な場合は、現場でのケアの変更が先立つこともある。</p>		

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	印	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
3. 多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	<p>事業所の多機能性を活かした支援</p> <p>本人や家族の状況、その時々要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている</p>	<p>以前1人暮らしだった入居者の外泊、公民館趣味の講座、月1、2回の温泉行き、通院などの送迎を本人、家族の状況に応じて、管理者、ユニット長、職員が柔軟に対応している。また夫の墓参り、善光寺参りなど外出企画を立てて事業所独自の外出支援を行っている。医療連携体制を生かし、併設法人医院から看護師が午前と午後各1時間来棟し、入居者の健康管理や退院後の点滴など医療面での支援をしている。</p>		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	<p>かかりつけ医の受診支援</p> <p>本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している</p>	<p>入居前のかかりつけ医を確認し、家族による受診が困難な時は管理者またはユニット長が送迎、介助を行っている。協力医(併設法人医院)やかかりつけ医の受診、歯科医の往診があるなど、適切な医療が受けられる体制が整っている。緊急時搬送は、基本的にはかかりつけ医や希望する病院を推進しており、付き添いについては家族と話し合いのうえ、家族のみ、家族と管理者、スタッフのみなどの対応を決めている。受診マニュアルがあり、医療機関への職員の対応がスムーズである。</p>		
19	47	<p>重度化や終末期に向けた方針の共有</p> <p>重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している</p>	<p>入居の際に、緊急時や重度化した時、終末期等の医療(心肺蘇生、延命治療等)について、本人と家族等の意向を確認し「医療に関する事項」の書面を作成している。重度に移行中の入居者については、状態の変化の都度会議で話し合い、家族と相談して対応している。本人の希望で、ホームで看取りを行い、お別れの儀式の後、献体した事例があるが、重度化して特別養護老人ホームや病院などを希望した場合は、継続したケアとなるよう支援している。</p>		

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	印	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
<p>. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</p>					
<p>1. その人らしい暮らしの支援</p>					
<p>(1) 一人ひとりの尊重</p>					
20	50	<p>プライバシーの確保の徹底</p> <p>一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない</p>	<p>個人情報に関する記録、書類等は施錠して保管している。職員は入居者の前でプライバシーに関する話題にしないよう意識し、居室へは必ずロックをしてから入るよう気を配っている。サービス提供する上で知り得た秘密、個人情報の提供は入居者、家族、利用代理人等との「個人情報利用同意書」にのっとって扱われている。職員の入居者への言葉かけや接し方はさりげなく、名前を呼ぶときも馴染みの呼び名を希望する入居者以外は「さん」付けで呼んでいる。</p>		
21	52	<p>日々のその人らしい暮らし</p> <p>職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している</p>	<p>時間を区切った決められた過ごし方ではなく、入居者の気持ちを尊重して出来るだけ個別の希望にそった支援をしている。居室で過ごす方、布製コースターを縫う裁縫の得意な方、新聞を読む方、キッチンで昼食の準備をする方等、思い思いに過ごしていた。職員からは、申し送りの時間帯等の人員が少ない時は、個別対応が難しいことがあるとの意見がでている。</p>		
<p>(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援</p>					
22	54	<p>食事を楽しむことのできる支援</p> <p>食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている</p>	<p>朝、夕食の献立づくりや買い物は事務職兼栄養士が入居者の好みを反映して行っている。昼食は入居者と順番に買い物に行き、好みを反映し献立を考え食材を購入している。また、一人ひとりの出来る力に応じて調理(米とぎ、野菜の刻み、レタスちぎり、芋の皮むき等)、配膳、後片付け、食器洗い等に参加してもらっている。検食のため職員1名が入居者と一緒に食事をし、他の職員は見守り、さりげなく介助をしていた。後片付け、食器洗いも和やかな雰囲気で行われていた。</p>		
23	57	<p>入浴を楽しむことができる支援</p> <p>曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している</p>	<p>入浴時間帯は基本的には15:30～22:00だが、希望があれば深夜を除きいつでも入浴できる。入居者のその日の状態、希望により足湯の場合もある。また希望時間が集中したり、長い時間入浴する入居者のいるユニットでは、就寝前の入浴希望にそえない場合がある。職員と一緒に月に1、2回、温泉に行く温泉好きな入居者もいる。</p>		

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	印	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(3)その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	公民館の水墨画へ定期的に通う方、毎日音楽鑑賞を楽しむ方、ホームの花を活かして下さる方、食事の準備をする調理好きな方、お弟子さんと毎週ホームでお手前を披露する元茶道教師、職員と毎日勝負する将棋愛好家、小物作りを楽しむ裁縫の好きな方、週末競馬予想を楽しみにして競馬新聞を購入する方、ボランティアさんとともに自分の役割としている洗濯物たたみをする方、職員と一緒に温泉へ行く温泉好きな方等々、理念に沿って入居者の役割、楽しみごと、気晴らしの支援が実践されている。		
25	61	日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	毎日希望者を募り、昼食の食材を買いに近くのスーパーに出かけている。家族と食事に外出したり、車で職員と化粧品を買いに行ったり、近くにある馴染みの丘に散策に出かける入居者がいる。職員配置によっては希望日時にそえないこともあるが、時間をずらしたり、日取りの変更を約束して対応している。買い物先がすぐ近くのスーパーに偏り気味なので、少し離れた所にある駅前商店街等地域の馴染みの場所にも出かけられるよう支援していきたいとしている。		家族から外に出る機会を増やして欲しいという要望もある。ホームでも日々の外出先が偏り気味であることを認識していて、地域のいろいろな場所への外出支援も考えている。外出は地域の人々の理解、協力を得るためにも重要なので、今後の取り組みを期待する。
(4)安心と安全を支える支援					
26	66	鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	全員外出時などを除き、日中は玄関の施錠をしていない。夜間帯は、夜勤者2人(各ユニット1人)なので防犯上玄関施錠をしている。離設時マニュアルがあり、離設対策としてはユニット入口にドアベルを付けて、職員同士声を掛け合い、見守り、所在確認をしている。身体拘束マニュアルには入居者の行動を制限することの弊害が記載され、鍵をかけないケアに取り組んでいる。		新人職員が多く、身体拘束マニュアルはあるが理解していない場合があり、勉強会や職場内研修が必要であると管理者は認識している。いつもの通りで大丈夫という職員の馴れが見られ、日中、来訪者が来ても職員がドアベルの音に気づかないことがある。入居者が出て行く気配を見落とさない見守り時の声のかけあいや職員間のコミュニケーション、さらに地域の協力関係等の構築に努めることを期待したい。
27	71	災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	火災、地震など災害時の対応マニュアルは、日中、夜間などの時間帯別、出火が近隣かホーム内かの場所別に対応したマニュアルとなっている。避難訓練は入居者と一緒に消防署が立会いのもと定期的に行っている。地域の人びとの参加、協力は現時点では得られていないが、職員は日ごろから働きかけていく必要性を認識している。		前回の外部評価でも運営推進会議等で災害時の地域の協力体制を自治会などへ働きかけることを提案し、職員はその必要性を認識していたがその後の進展はない。職員だけの誘導には限界があるので、今後も警察、消防署等との連携を図り地域住民と一緒に災害時避難訓練を行うなど、協力体制を築く努力を期待する。

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	印	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(5)その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	<p>栄養摂取や水分確保の支援</p> <p>食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている</p>	<p>昼食は職員が入居者とその日に食べたいもの等を相談し、朝、夕食は栄養士の資格をもつ職員が献立を作っている。普段から入居者の状態や好み苦手なもの、アレルギーなどを把握して、噛み切れない食材は小さく切ったり、飲み込めない入居者にはペースト食を提供したり、代替食を用意するなど必要な水分、栄養が確保できるよう柔軟に支援している。体重チェックをして水分、糖分、塩分を摂りすぎることがないように注意を払っている。</p>		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1)居心地のよい環境づくり					
29	81	<p>居心地のよい共用空間づくり</p> <p>共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている</p>	<p>玄関周りはプランターに季節の花が植えられ、テーブル、椅子が置かれて気軽に談話できるスペースとなっている。入口は入居者が活けた花や定期的に交換される観葉植物が飾られ、ホールのテーブルにも花が置かれている。壁には入居者が職員と作成した懐かしい田舎の秋の風景の壁掛けがかけられていて、季節を感じることが出来る工夫をしている。また共用スペースの清掃を夜間帯に職員が行い、清潔保持がされ居心地よい空間となっている。</p>		
30	83	<p>居心地よく過ごせる居室の配慮</p> <p>居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている</p>	<p>入居時、家族に認知症の人がその人らしく暮らすために出来るだけそれまでの部屋に近い環境が好ましく、馴染みの物（家具、食器など）が重要であることを伝え、必要であれば職員が引越しの手伝いをしている。仏壇、タンス、装飾品、カーテン、時計、テーブル、椅子、畳など本人の使い慣れた家具や好みの生活用品を持ち込んでいる。</p>		